

## O2-015

母親が示す子どもへの養育態度に対する  
母親と子どもの受け止め方の相違西尾 栞<sup>1</sup>、塩飽 仁<sup>2</sup>、入江 亘<sup>2</sup>、菅原 明子<sup>2</sup><sup>1</sup>東北大学医学部保健学科 看護学専攻<sup>2</sup>東北大学大学院医学系研究科 保健学専攻 家族支援看護学講座 小児看護学分野

## 【目的】

子どもの意思決定への参加の促進には、日常生活での保護者による子どもの意思の尊重が影響すると考えられる。そのため本研究では、過保護や過干渉の養育態度に着目し、母親の養育態度に対する母親と子どもの認識に相違があるかを明らかにする。

## 【方法】

児童館8館の協力のもと、小学2年生から中学2年生の子どもとその母親を対象とする質問紙調査を実施した。7つの生活場面の例を提示し、母親から子どもへの養育態度が「子ども扱いであるか」について、子どもと母親それぞれに視覚的評価スケール(VAS)で評価してもらい、回答を集計し統計的に解析を行った。実施にあたり、所属施設の倫理委員会の承認を得た。

## 【結果】

質問紙を191組配布し、母親83名、子ども84名の回答を得た。親子ペアの回答が84組、母親のみが8名だった。養育態度に対する子どもと母親の認識には7場面中5場面で有意差があり、同じ場面を母親の方がより子ども扱いであると感じていた。性別で比較すると、子どもの回答では、「普段できていることを褒められること」に対して、男児の方が強く子ども扱いであると感じており、母親の回答では、「子どもが自分でできることを一人でさせないこと」に対して、女兒を養育している母親の方が強く子ども扱いと感じていた。また、子どもと母親の関係性についての設問で、「とても仲が良い」を選択した子どもと「仲が良い」と選択した子どもの2群で比較したところ、「とても仲が良い」を選んだ子どもは、「仲が良い」を選んだ子どもに比べ「話を聞いてもらえずに叱られること」に対して子ども扱いと感じており、「普段できていることを褒められること」に対して適切な対応であると感じていた。

## 【考察】

母親と子どものかわりについて、母親は妥当だと考えているが、子どもは自分を子ども扱いしないでほしいと感じているという仮説のもと調査を行ったが、結果から、母親は子どもへの対応に関して、子どもがより自分でやる事が望ましいととらえ、子どもは比較的自由に自立していないことが示唆された。

## 【結論】

今回の調査により、養育態度に対する子どもと母親の認識には差があり、母親の方がより母親の養育態度を子ども扱いであると感じていることが明らかになった。子ども自身による意思決定の促進のために、子どもが自立して考えることを身に付けられるような支援が必要である可能性が示唆された。

## O2-016

後期早産児における早産児骨減少症  
発症リスクの検討岡本 年男<sup>1</sup>、高橋 健太<sup>1</sup>、杉山 達俊<sup>1</sup>、青山 藍子<sup>1</sup>、  
二井 光磨<sup>1</sup>、長屋 建<sup>1</sup>、高橋 悟<sup>2</sup><sup>1</sup>旭川医科大学病院 周産母子センター<sup>2</sup>旭川医科大学 小児科学講座

## 【背景】

胎児の骨形成は母体から供給されるカルシウム(Ca)とリン(P)によって進み、その約8割が妊娠第3三半期の28週以降に生じる。そのため28週未満の超早産児は早産児骨減少症(MBD)の高リスクであるが、34週以降の後期早産(LP)児のリスクについてはほとんど検討がなされていない。また、生後のビタミンD(VD)欠乏もMBD発症に関わるが、高緯度・寒冷な当地域はVD欠乏の頻度が高い。

## 【目的】

VD欠乏の多い当地域における、LP児のMBD発症リスクを明らかにすること。

## 【方法】

2019年9月から2023年12月までの間、当院NICUに入院した胎34~35週の早産児のうち、染色体異常、長期経静脈栄養、臍帯血25-hydroxyvitamin D(25OHD)未測定の子を除き、生後2~4週間に血清アルカリフォスファターゼ(ALP)、Ca、P、副甲状腺ホルモン(iPTH)、尿中Ca/クレアチニン比(uCa/Cr)、尿細管P再吸収率(%TRP)を同時測定したものを対象とした。iPTH $\geq 66$  pg/mlをCa不足群、P $\leq 6$  mg/dlかつ%TRP $\geq 99\%$ をP不足群とし、いずれも満たさない正常群と比較検討した。なお25OHD測定下限4.0 ng/ml未満は4.0 ng/mlとみなした。

## 【結果】

対象の66例全例が臍帯血25OHD $< 20$  ng/mlのVD欠乏状態で、57例(86.4%)が生後VDサプリメントを摂取していた。Ca不足群は10例(15.2%)、P不足群は21例(31.8%)で、これらのうち1例はCaとPいずれも不足していた。正常群と比べ、Ca不足群は有意に出生体重が小さく、臍帯血25OHDが低く、生後1週間以内のCa最高値が低かった。また、P不足群は有意に母乳中心の栄養が多く、生後1週間以内のP最低値および最高値が低かった。Ca、P不足群はいずれも正常群に比べ有意にALP値が高く、10例(33.3%)はMBDの存在を示唆するALP $> 500$  IU/lを示していた。

## 【考察と結語】

VD欠乏の多い当地域では、ある程度骨形成が進んだ状態で出生するLP児であっても約半数が生後2~4週でCaまたはP不足となり、MBDのリスクを有していた。VD欠乏の程度や栄養法に応じてCa、P、VDを適切に投与しながら定期的な評価を行い、MBD発症予防に努める必要がある。